

# 稲作情報 総括版

令和7年12月23日発行  
秋田県仙北地域振興局農林部農業振興普及課

## 気象経過 及び 生育概況

### 1. 気象経過（アメダス：大曲）

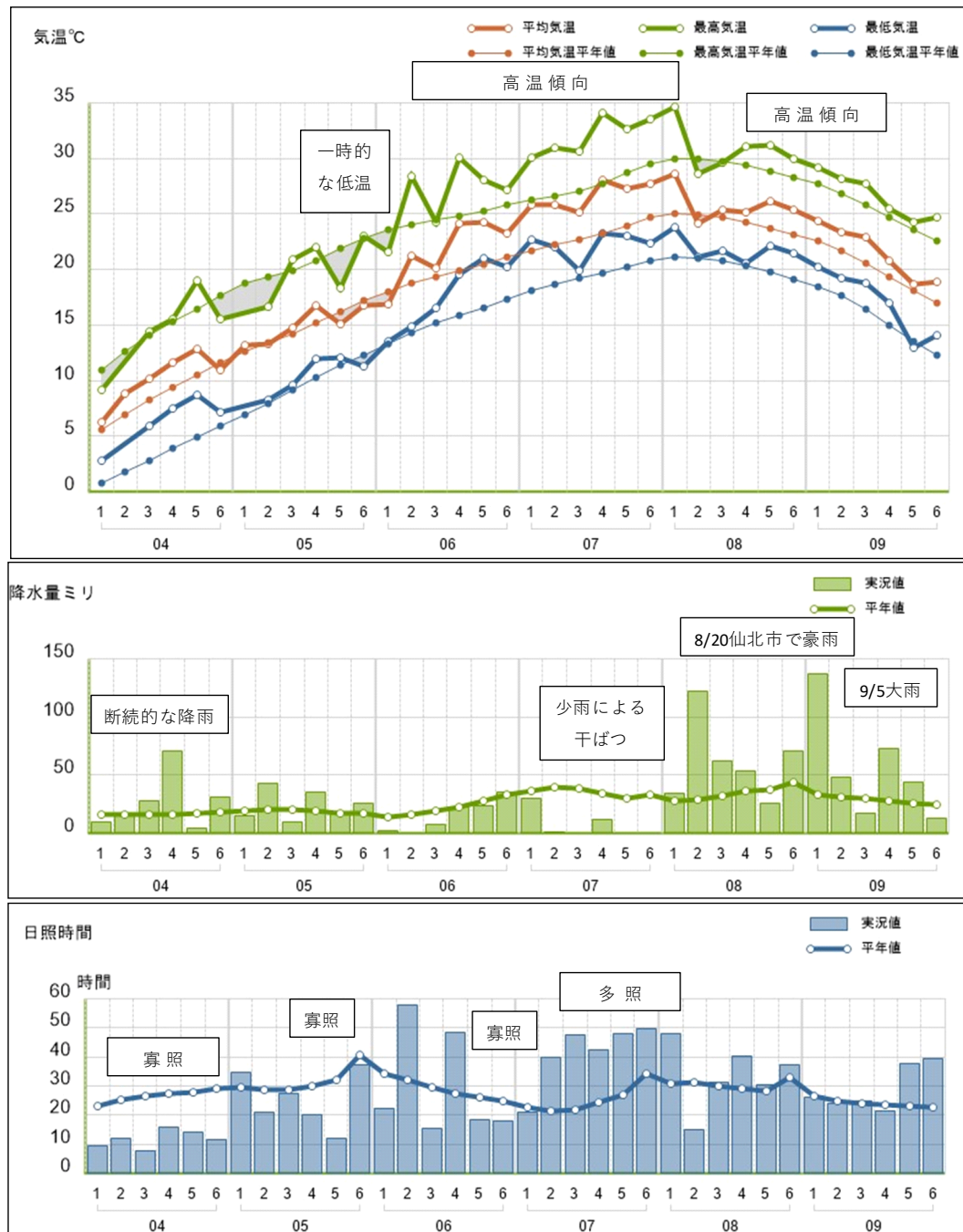


図1 R7年4月～9月の半旬ごとの気象経過(秋田県農業気象システムより引用)

## 2. 生育概況

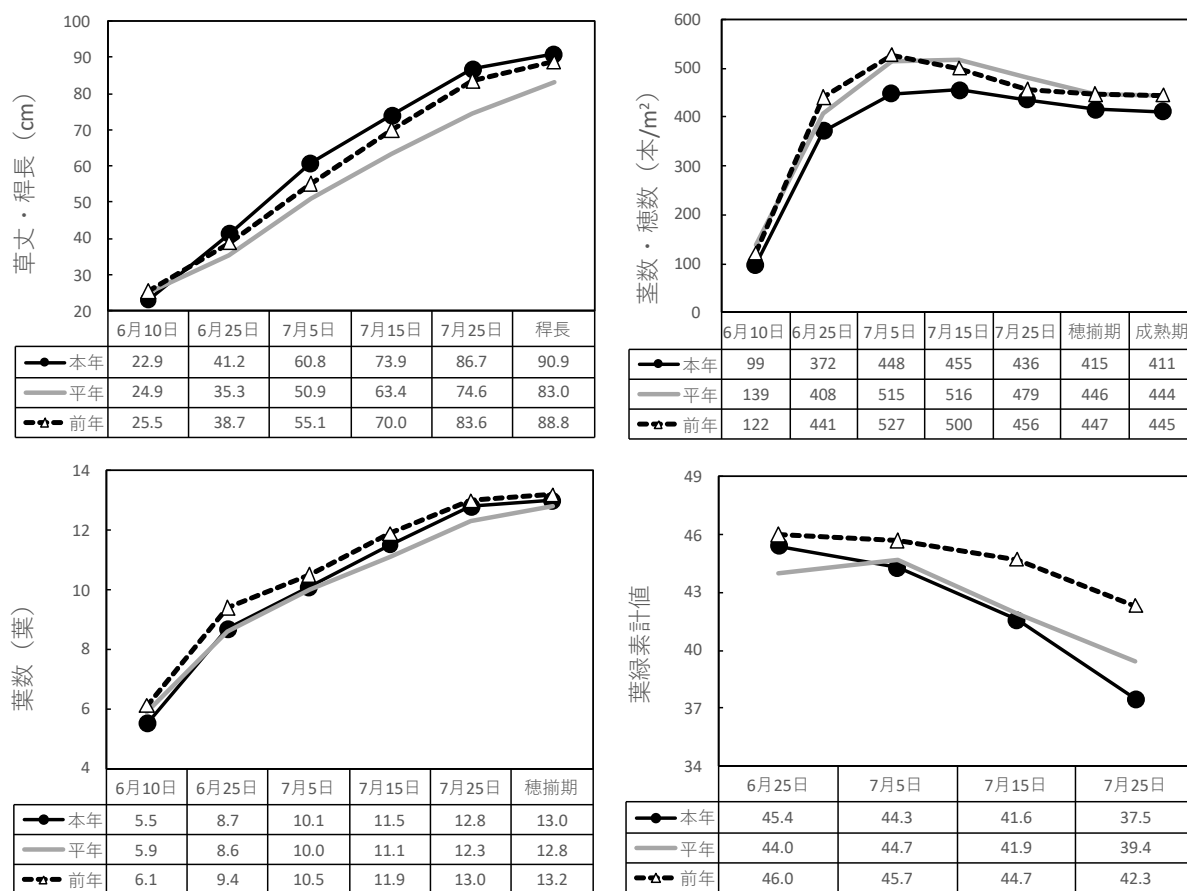


図2 水稻定点調査における生育経過(あきたこまち10地点平均)

表1 令和7年 管内の水稻作業進捗状況(農業振興普及課調べ)

	始期(5%)			盛期(50%)			終期(95%)		
	本年	平年差	前年差	本年	平年差	前年差	本年	平年差	前年差
播 種	4月19日	±0日	遅1日	4月24日	早1日	±0日	4月29日	早1日	±0日
耕 起	4月30日	遅2日	遅4日	5月6日	遅1日	遅2日	5月15日	遅2日	遅3日
田 植	5月15日	早1日	±0日	5月25日	遅1日	±0日	6月1日	遅1日	早3日
刈 取	9月12日	早6日	早2日	9月27日	早1日	遅3日	10月5日	早7日	早4日

### (1)育苗期

4月の降水量は多く、日照時間はかなり少なくなりました。また、気温は高く経過しましたが、降水量が多くなったことからほ場の乾燥が進まず、耕起作業は平年よりやや遅れました。

管内の播種作業(盛期)は4月24日(平年差早1日)で平年並となりました。

本年は高温障害による出芽不良等は少なくなりましたが、育苗期間中は日照が不足したことから草丈はやや短めに推移しました。また、換気が不十分で加湿傾向となったハウスではカビによる立ち枯れ症状が確認されました。

## (2) 田植期～分けつ期

管内の田植え作業の盛期は5月25日(平年差遅1日)で、期間中は断続的に降雨がみられましたが、概ね作業は順調に進みました。

5月4半旬～6月1半旬の気温は平年より低く、日照時間は少なくなりました。また、田植え日翌日からの移動平均気温の推移(図3)では、5月17日以降に田植えしたほ場では平年より気温が低く経過したことから、活着までに時間を要したことで葉数の進展や分けつ発生が緩慢になったと考えられました。

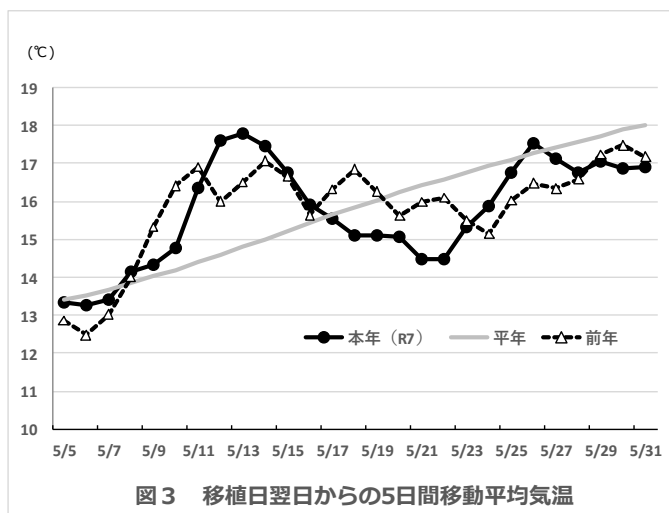


図3 移植日翌日からの5日間移動平均気温

6月25日の定点調査結果(あきたこまち、10地点平均)は、草丈は41.2cmで平年より長く(平年比117%)、茎数は372本/㎡(平年比91%)で少なく、葉数は8.7葉(平年差+0.1葉)で平年並でした。葉色(SPAD値)は45.4で平年よりやや濃く(平年差+1.4)になりました。

6月以降の気温はかなり高く経過し、日照時間は平年並に経過したことから、遅れていた分けつ発生が促進されるなど生育は回復傾向となったものの、最低気温が高く気温の日較差が小さくなったことや6月末の日照不足により茎数の増加は緩慢となりました。

また、6月下旬は最低気温が高く、日照時間が少なかった影響により草丈が伸長しました。

## (3) 幼穂形成期～減数分裂期

東北地方では6月14日頃(平年差1日早)に梅雨入りしたものの7月は気温がかなり高く、降水量はかなり少なくなった影響で、地域によっては用水不足で中干し以降の入水管理が十分にできず、干ばつ傾向となりました。

7月15日の定点調査結果(あきたこまち、10地点平均)は、草丈は73.9cmで平年より長く(平年比117%)、茎数は455本/㎡(平年比88%)で少なく、葉色(SPAD値)は41.6で平年並(平年差-0.3)でした。

多くの地点で幼穂形成期を過ぎていたことから、この時期の生育栄養診断では草丈が長く、葉色が濃いほ場では、IV型やV-2型に分類される地点が多くなりました(図4)。

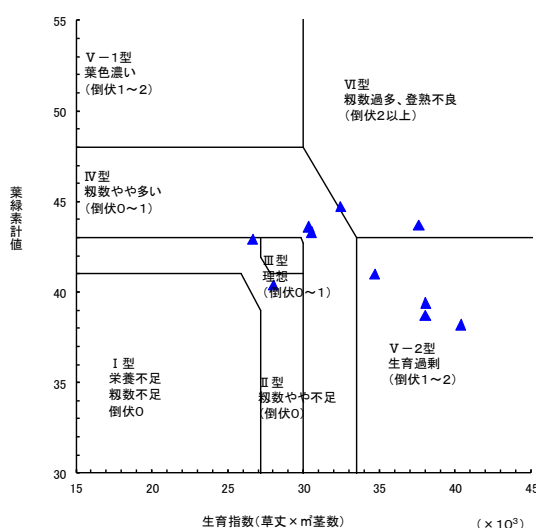


図4 幼穂形成期における栄養診断(県南)

一方で、高温多照の気象経過により、幼穂形成期以降に急激に葉色が低下するほ場があり、状況に応じて追肥が実施されました。

#### (4) 出穂期～成熟期

7月の気温がかなり高く推移した影響により7月中に走り穂が見られるなど、出穂期は7月31日で平年より2日早まりました。

本年は茎数が少なかったことによる補償作用の他、減数分裂期以降の葉色が維持されたことから一穂粒数が多くなりました。

出穂期以降は高温で経過し、登熟は順調に進み成熟期が早まったことから収穫作業の始期は9月12日(平年差早6日)と早まりました。

この他、出穂期以降は気温が高く、降水量が多くなったことで穂いもちの発生が散見されました。

## 作 柄 概 況

### ～ 県南地域の作況単収指数は「103」 ～

令和7年12月12日に東北農政局が公表した令和7年産水稻の10a当たりの収量(ふるい目幅1.90mm)は、全県 559kg/10a、県南 576kg/10aであり、作況単収指数は全県及び県南いずれも「103」となっています。

#### 1. 水稻定点調査ほの収量及び収量構成要素(あきたこまち10地点平均)

水稻定点調査ほ(あきたこまち10地点平均)における収量構成要素では、 $\text{m}^2$ 当たり穂数は411本(平年比93%)で少なくなったものの、一穂粒数は80.0粒(同比115%)で多くなったことから、 $\text{m}^2$ 当たり粒数は32.6千粒(同比107%)と多くなりました。千粒重は23.2g(同比102%)と大きく、登熟歩合が90.0%と平年より4.7ポイント高くなったことから、水稻定点調査ほにおける収量(ふるい目1.90mm)は603kg/10a(同比104%)で多くなりました(図5、表2)。

本年は、生育期間を通して茎数が平年を下回って推移し、穂数不足が懸念されましたが、一穂粒数が増加したことで $\text{m}^2$ 当たり粒数が多くなりました。

また、 $\text{m}^2$ 当たり粒数が多い場合は条件によっては登熟歩合の低下による未熟粒や充実度不足が懸念されますが、本年は登熟期間が高温で経過したことや倒伏が少なかったことで登熟歩合が高くなった他、千粒重が大

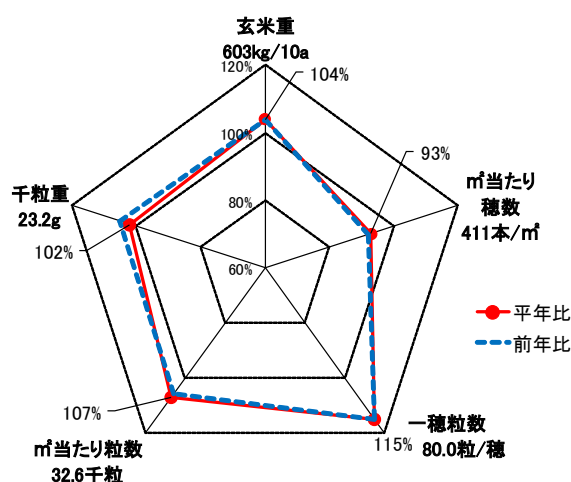


図5 管内定点調査ほの収量構成要素  
(あきたこまち10地点平均)

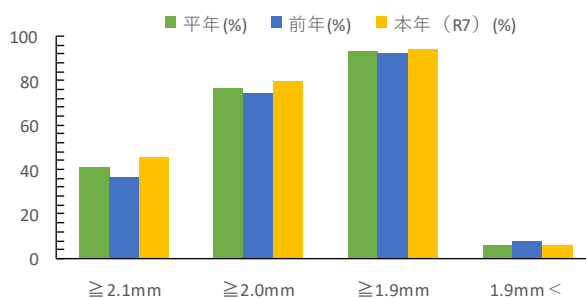


図6 粒厚分布  
(水稻定点調査 あきたこまち10地点の平均)

きくなった(図6)ことで、収量の増加につながったと考えられました。

表2 水稻定点調査における収量調査結果(あきたこまち10地点平均)

	稈長 cm	穂長 cm	玄米重 kg/10a	穂数 本/m <sup>2</sup>	一穂粒数 粒/穂	m <sup>2</sup> 当たり粒数 千粒	登熟歩合 %	千粒重 g
本年(R7)	88.0	18.9	603	411	80.0	32.6	90.0	23.2
平年比(%±)	108%	107%	104%	93%	115%	107%	+4.7	102%
前年比(%±)	102%	106%	104%	92%	115%	106%	+2.6	105%

※玄米重はふるい目1.9mm、水分15%換算した値

## 2 品質について

管内の1等米比率(水稻うるち米)は95%で前年より高く、着色粒及び形質による落等が見られる他は品質は良好となっています(農業振興普及課調べ、11月末現在)。

## 次年度に向けた対策

本年は6月以降は高温で経過した他、7月は降雨不足による渇水や8月・9月には局所的な大雨に見舞われるなど、気象変動が大きい年次となりました。

近年は、地球温暖化による高温や大雨被害の頻度が高まっており、気象変動のリスクを回避するためには基本技術の励行と併せて、対応技術の課題を整理し、次年度に向けた対策を見直しましょう。

### 1 高温対策に向けて

#### (1) 高温に有効な土作り

高温下においても高品質米を生産するためには、水稻の根の活性を生育後半まで維持し、養水分の吸収を持続させながら、登熟期の光合成能を高めるための土壌環境を作ることが重要です。そのために以下の対策を図り、高温下にも耐えうる稲作りを行ってください。

##### ○根を深く張らせる環境作り

土壌環境を整えることで水稻根域が拡大し、根の活性が高く維持されることで、適正な養水分が供給されます。作土層は少なくとも15cmは確保し、高温時でも根の活性を維持出来るようにしましょう。

##### ○ケイ酸質資材(ケイカル・ケイ酸カリ等)の投入

ケイ酸は稲に重要な養分です。稲体にケイ酸が多く含まれると、白未熟粒が減少したり、倒伏や病害に強くなることが知られています。粃で持ち出すケイ酸が20~30kg/10a程度といわれているため、土作り資材でしっかりと補給してください。

#### (2) 高温登熟を回避する水管理

登熟期間の高温は玄米品質へ大きく影響します。高温登熟による品質低下を防ぐためには、飽水管理や積極的な水の入れ替え、入水管理によって地温や稲体の温度を下げる管理を



行うことが大切です。しかし、高温によって使用するかんがい水の温度が高くなっている場合は、入水しても地温が下がらず逆に品質低下につながることを懸念されます。このような場合は、土壌を常に湿潤状態（足跡に水が残る程度）に保つ飽水管理により登熟の促進及び高温障害による品質低下を回避してください。

また、本年は中干し以降に渇水となりイネが水分を必要とする時期に十分に入水できない事例もあったことから、限られた水資源を地域全体で活用できる節水対策としても飽水管理は有効であると考えられます。なお、ほ場内に効率的に水を巡らせるために溝切りを組み合わせることが重要です。

## 2 適正な初期生育量の確保

### (1) 適期の田植えと栽植密度の確保

極端な早植えや遅植えは、その後の気象経過により作柄や品質に大きく影響します。ハウス内気温やかん水等に留意して健苗育成に努め、適期に移植を行いましょう。

また、適切な種子予措を行うためにも、浸種水温の確保が難しい早植えを避け、計画的な作業に努めます。低温時による初期生育の停滞を避け、出穂期が早まることによる高温登熟の影響を軽減するため、移植は5月20～25日頃を目安に行いましょう。

本年は初期の茎数が確保できずに穂数不足に繋がりました。要因の一つには、近年の栽植密度が低下傾向が考えられます（図7）。栽植密度の低下は田植え後の茎数確保（穂数確保）に大きな影響を与え、作柄、品質、食味の低下が懸念されます。

そのため、m<sup>2</sup>当たり21～22株（70株/坪）以上を基本として、1株当たりのかき取りは3～4本を目安に実施しましょう。

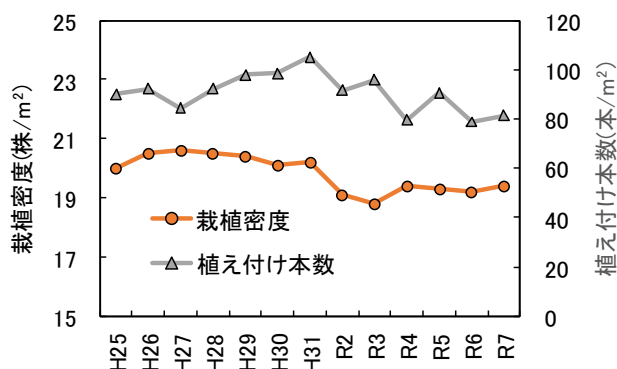


図7 栽植密度の推移

### (2) 水管理による適正な生育量の確保

本田の水管理は、安定した作柄を確保するため非常に重要な技術です。特に初期生育の良否は、その後の生育量や出穂時期、収量にまで影響します。このため、活着後は温暖な日に浅水、寒い日に深水とすることにより、水温・地温を高めて初期生育の確保に努めましょう。

中苗あきたこまちでは、6号1次分げつが発生したら中干しを遅れずに実施して、充実した有効茎の確保を図ります。中干しの期間は7～10日位とし、田面に亀裂が1～2cm入り、軽く足跡が付く程度としましょう。過度の中干しは根を傷め、稲体の衰弱につながるので注意しましょう。中干し終了後は間断かん水を行い、土壌を酸化条件にし、根の伸長を促進します。

幼穂形成期から減数分裂期頃にかけては稲が低温に弱い時期です。この時期に日平均気温20℃以下や最低気温17℃以下の低温が予想される場合は、深水管理とします。

出穂直後は水を多く必要とする時期なので、出穂期後10日間は、湛水状態にして水を切らさ

ない管理をします。

また、高温が続く場合には水温が高くなることから、水の入れ替えに努めます。その後は間断かん水を基本とし、早期の完全落水は避け、品質向上に努めましょう。

高温時やフェーン現象等の乾燥した風が強い日は、湛水や飽水管理等の水管理を行います。

### 3 生育中期の適正な施肥管理

生育中期の施肥管理は、理想とする生育量と比較する生育・栄養診断により適切に実施し、追肥の要否や施肥量の判断を行います。ほ場間のバラツキが大きい場合は、ほ場ごとに適期に生育・栄養診断を実施して対応しましょう。

m<sup>2</sup>当たり粒数が過剰になると整粒歩合は低下し、米粒中の窒素含有率は高くなり、品質・食味ともに低下します。あきたこまちの目標収量を570kg/10aとした場合に、必要なm<sup>2</sup>当たり粒数は30.3～31.5千粒です。幼穂形成期の栄養診断による追肥により、目標のm<sup>2</sup>当たり粒数の確保に努めましょう。

中干し以降の葉色低下は、下層への根の伸長を減少させるとともに、収量・品質へ大きく影響します。このため、肥効調節型肥料の利用や堆肥の施用による地力増強を図り、葉色低下を防止しましょう。

### 4 斑点米カメムシ類の防除対策(雑草防除を徹底)

本年は春先の高温により斑点米カメムシ類の越冬世代の発生が早まったものの、生育期間を通して発生量は少ない～やや少なく推移しました。しかし、水田内のノビエやホタルイ等の発生が多かったほ場では本田内でのすくい取り数は多くなったことから、斑点米による着色粒で落等した地点も見られました。

斑点米の発生防止対策としては、出穂期後の適期薬剤防除と併せて水田内のノビエやカヤツリグサ科雑草の防除を徹底することが重要です。

また、地域内でまとまって農道・畦畔、休耕田等の除草をすることは斑点米カメムシ類の発生密度を低下させる効果があります。

水田雑草の除草剤の使用は、雑草の種類と発生量に応じて適切な除草剤を選択し、適期に使用するとともに(図8)、使用上の注意を守り、除草剤使用後7日間は止め水として水質汚染防止に努めましょう。

除草効果を十分発揮させるために、畦畔補修等の漏水対策や田面の均平、ほ場条件に合わせた剤型(フロアブル、ジャンボ剤等)の選択が効果的です。また、水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前には除草剤を使用しないようにしましょう。

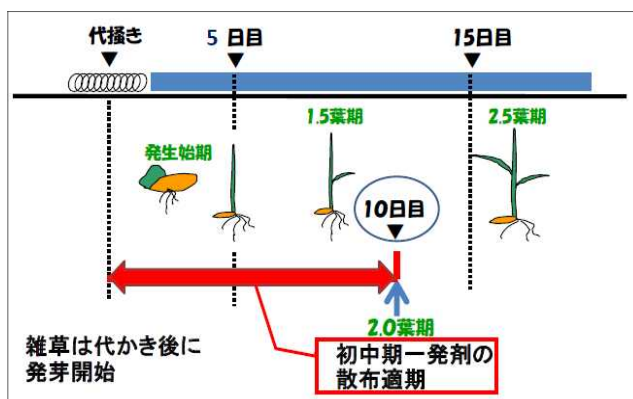


図8 水稻除草剤の効果的な使用時期の例

## 5 いもち病防除対策

本年は6～7月に葉いもちの発生が少なかったほ場でも出穂期～穂揃い期の降雨によって、穂いもちの発生に繋がったほ場が散見されました。

本田におけるいもち病の発病の主因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。また、乾燥状態で冬を越した稲残渣(稲わら・籾殻)も伝染源となるため、前年の稲わら・籾殻を育苗施設付近から撤去しましょう。適正かつ効果的な種子消毒、育苗期いもち防除で、本田への持ち込みを最小限にくい止めることが重要です。

本年、穂いもちの発生が見られた人は、次年度は上記の耕種的防除とベンレート水和剤、ビームゾルのいずれかで育苗期いもち防除を必ず行い、本田葉いもち防除には育苗箱処理剤を使用して穂いもちの感染源となる葉いもちの発生を未然に防ぐよう努めましょう。

疎植栽培や高密度播種苗栽培では、側条施薬装置を用いた防除が望ましいです。また、出穂期前後が多湿の年は穂いもちが多くなりやすいので、穂いもちの適期防除に努めましょう。

## 6 カドミウム汚染米対策を徹底しましょう

カドミウム汚染米が発生する恐れがある地域では、「あきたこまちR」以外の品種ではこれまでと同様に7月中旬～8月下旬(出穂期が8月2日の場合:7月12日～8月23日頃)までの出穂前3週間、出穂後3週間の計6週間は、湛水管理を必ず実施しましょう。

## 大雪被害に備えましょう。

○令和7年12月23日に気象庁より発表された東北地方の3か月予報(1月～3月)では、東北地方の気温は平年並または高い確率ともに40%で、東北日本海側の降雪量はほぼ平年並の予報です。

○現時点の降雪量は平年並の予報ではありますが、大雪によるパイプハウスや果樹などの農作物への被害を最小限に抑えるため、「雪害対策マニュアル」を参考にしながら、事前に被害防止対策を実施しましょう。

秋田県公式サイト「美の国あきたネット」で「雪害対策マニュアル」を検索！

【参考URL】 <https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/61506>